



**1 イカ釣り船**：イカ釣り漁船沖合イカ釣り漁業は、夜間集魚灯に集まるイカを自動イカ釣り機によって漁獲する漁業。泊漁港では、昭和40年代までは19トン未満の動力漁船で、昭和42年に7隻の30トン以上の大型漁船が出現。八戸港の他に全国の漁港を拠点に操業の近代化も進められた。パラシュートアンカーを海の中に沈めることによって船の先端を誘導し、波の流れで船の転覆を防ぎ、魚の流れに沿って船を動かし漁をおこなう。



**2 落とし網（ドアミ）**：定置網の一種で、垣網、囲い網、登り網、箱網で構成される。岸から張り出した垣網で誘導した魚群を、上り傾斜のついた登り網でさらに上部の入り口へと導き、落ち込むようにした網である。魚が網から逃げ出しにくくなっている。イワシの漁期は9月から1月、最盛期は11月。その他には、鯖（8～9月）・鮭（11月）・イカ（11～12月）・カツオ（9～10月）などが捕れる。



**3 角網**：定置網の一種で、長方形の身網とこれに直角に張る垣網からなり、ニシン・イワシなどを捕る。身網は、定置網の主となる部分で、垣網によって導かれた魚群を囲う袋状の網で、囲い網である。垣網は、魚群を本網などに導くため、水中に垣根のように張る網で、袖網である。



**4 テルビル磁石式電話機**：1896年（明治29年7月）この電話機は、以前より高感度となった。電話局の呼び出しは、電話機内部の磁石発電機を回し、電流を送って行った。昭和40年頃まで約70年間使用された。



**5 600-A2形自動式卓上電話機**：1963年（昭和38年～44年頃）日本電気株式会社の黒電話で、600形電話機は昭和37年に登場し、昭和46年にはカラーバリエーションが増えて象牙（ぞうげ）色や薄緑色も製造された。「通話性能と経済性の上で完成された電話機」といわれる。日本において、初めてプリント基板（きばん）を使用した量産型電話機。



**6 マミヤフレックス・オートマツトB**：1954年（昭和29年発売）このマミヤフレックス・オートマツトBは、特徴の多いマミヤフレックスをより普通の2眼レフにしたもので、カメラ全体は、スマートで、レンズも自社製のセコールSを装備している。シャッターボタンは、手前に引く形のレリーズボタンです。



**7 足踏みミシン・電子ミシン・コンピューターミシン**：足の踏み込みを動力にした縫い合わせる機械。ミシンはイギリスで約200年前に発明され、約100年前から国産化された。戦後、和装から洋装に変わっていったとき、ミシンが盛んに製造され、花嫁道具となり一般家庭にも普及した。足踏みミシンはゆっくり踏んだりして、自分の好きなペースで縫うことができる。



**8 洗たく板とたらい**：洗濯のための板状の道具。横から見ると波の形の段がついている。ヨーロッパで発明され、明治時代に日本に伝わる。今は、楽器（ウォッシュボード）や靴下などの予備洗いで使われることがある。左手で洗濯物をおさえ、右手で洗いたい部分をつかんで、ゴシゴシこする。石けんは溶けてしまわないように、上のくぼみに入れて、必要な時に使った。



**9 手回し洗濯機**：この洗濯機は、洗濯物と水・石鹼を入れて、回すだけ。石鹼の泡が出て中の気圧が上がり、ふたを取ると一気に気圧がさがり汚れを落とすという仕組み。



**10 火熨斗と焼きごて**：ひのしは、江戸時代から使われていて、丸い部分に火のついた炭を入れて、その熱で布のシワをのばす。焼きごては、火鉢の中に入れて熱くし、水を少しかけて蒸発すると、熱くなっていることがわかり、細かい部分などに使った。



**11 炭火アイロン**：明治時代に外国から入ってきた。煙やガスを出すために、煙突がついている。フタを開けて火のついた炭を入れて、その熱で布のシワをのばす。明治になって西洋から伝わり広く普及した。昭和30年代の電気アイロンの普及により、しだいにその姿を消すこととなった。



**12 昔のそろばん**：そろばんは 500 年位前に中国から伝わり、その頃は珠が丸く、梁の上に五珠が2つ、そして梁の下の一珠が5つ珠あった。尺貫法では、十六進法の方が計算しやすかったためだ。江戸時代から昭和の初めまで使われていた。しかし、昭和10年当時の文部省の省令で現在のそろばん（上が1つ、下が4つ）と変え、メートル法に合わせた。



**13 機械式卓上計算機**：日本では、タイガー計算器が独占的シェアをもっていた。置換レバーに数値をセットし、置数レバーを回すと、計算結果が右ダイヤルに表示する仕組み。加減ならばソロバンのほうが手軽だが、乗除算では計算違いが少なく高速に計算できた。電動計算機や電卓の出現により、それらに置き換えられた。展示品は日本計算器社製。

**14 テレビ・テレビジョンセット**：1897年 ドイツのフェルディナント・ブラウンがブラウン管を発明。1911年 ボリス・ロージングが世界で初めてテレビの送受信実験を公開。1939年 日本でテレビ実験放送開始。1952年 松下電器産業が日本初の民生用テレビを発売。1956年 NHKのカラーテレビ実験放送開始。

**15 真空管ラジオ コロンビア RA-71**：ラジオは、ラジオ放送開始大正14（1925）年から昭和にかけてテレビが出るまで流行した。このラジオは、日本コロンビア株の全波スーパーラジオで、高級受信機。戦後短波が解放され、1948年にはオールウェーブ（短波と中波）としてコロンビア RA-61（2bans, IF1, ST6 球）が発売された。国民型2号が¥2,310に対して¥17,000もした。これは、その後続機にあたる。



**16 行燈とランプ**：一般的に普及したのは江戸時代で、それまでは火皿がおおわれていなかった。中央の火皿に油を入れ、木綿などの灯心に点火して使用。当時の和ロウソクはととも高く、主に菜種油を使用。庶民はさらに安い魚の油（いわしなど）を使用。さらに貧しい人々は「暗くなったら寝る」という生活。明治時代に石油ランプが普及し始め、菜種油の行燈は姿を消していった。



**17 昭和30年代の自然素材のおもちゃ**から、その後工業が発達しプラスチック製のおもちゃが登場する。

**18 天秤棒**：天秤棒とは、両はじに重い物をぶら下げたり、たくさんの軽い物を取り付けたりして、肩に担いで運ぶことを目的に作られた棒。江戸時代、天秤棒一本あれば行商をして千両を稼ぎ、財を成すという近江商人の「近江の千両天秤」の慣用句もある。全世界で今も使われている民具である。

**19 石臼**：溝を掘った丸い石を重ねたもの。上下に重ねた石をすり合わせ、上の穴からそばや小麦、大豆などを入れて粉にするための道具。



**20 足踏み脱穀機**：明治時代末になると、千歯扱きよりも性能のいい足踏み脱穀機が細王舎によって開発され普及するようになった。



**21 唐箕**：風力を利用して穀物（豆・アズキ等）を分ける道具で、明治、大正、昭和と、長く使われた。中国から伝わった箕（み）なので、そう名付けられた。



**22 斧**：石器時代から世界中にある。伐採斧は、打ち込むため刃渡りが狭く、峰から刃までが長い。枝打ち斧（はつり斧）は、枝払いや大まかな面付に使われ、刃の形状は広く、短い柄が装着されている。薪割り斧は、刃は分厚くて重く、くさびに近い形状である。



斧の刃に刻まれている3本線はミキでお神酒のこと、4本線はヨキで木が育つために必要な「土・水・空気・太陽」のことや、身（3）を避（4）ける（倒木を避ける）という意味もあり、安全祈願の印である。

**23 火鉢と長火鉢**：火鉢と炭は、奈良・平安時代から上流階級で使われ、江戸時代に庶民に広がった。近くによって暖をとる、炭火の上に鉄瓶をかけてお湯を沸かしたり、網をのせて餅を焼いたり、便利に使える。



**24 八角時計**：明治19年（1886年）の標準時間が制度化（21年施行）されるまでは、まだ時刻を調整するには日時計に頼っていた。まず初めに全国の郵便局に八角時計が普及し、日本の時計（時間）の近代化を大きく切り開いた。これは大正時代の精工舎のゼンマイ式振り子時計である。

